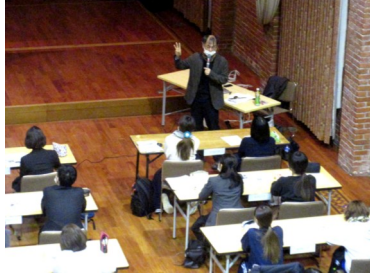


1月29日 保幼小連携研修を実施しました

今年度、連携活動を担当している保育所・幼稚園 5歳児担任、小学校1年(2年)担任教諭等を対象に保幼小連携研修会を実施しました。

グループワークでは、「連携活動における子どもの学びと育ち」というテーマのもと、記録シートを活用して連携活動の中に見られた幼児・児童の学びや育ちについて交流し、交流後、グループ発表を行いました。グループワークの視点は、①「記録シートの中に見られる子どもの学びや育ち」②「よりよい連携活動にしていくための手立てについて」の2点でした。各園・校の連携活動をまとめた実践シートをもとに、保育者・教員が共に実践を振り返り、幼児や児童の学びや育ちについて交流することで、今後の連携活動に大いに役立つものとなりました。

鳴門教育大学大学院教授の木下光二先生のご講演では、小学校に何をにつなげればいいのか等、連携活動の課題について学びました。



日時：平成31年1月29日(火) 14:30～16:45
場所：舞鶴市政記念館
内容：グループワーク 講義

参加園/校

永福保育園	朝来幼稚園	岡田小学校
岡田保育園	池内幼稚園	倉梯小学校
さくら保育園	倉梯幼稚園	倉梯第二小学校
昭光保育園	シオン幼稚園	志楽小学校
相愛保育園	橋幼稚園	新舞鶴小学校
平保育園	中舞鶴幼稚園	中筋小学校
タンポポハウス	ひばり幼稚園	中舞鶴小学校
なかすじ保育園	舞鶴聖母幼稚園	福井小学校
東山保育園	三鶴幼稚園	三笠小学校
八雲保育園	舞鶴幼稚園	明倫小学校
やまもも保育園	朝来小学校	由良川小学校
ルンビニ保育園	余内小学校	吉原小学校
うみべのもり保育所	池内小学校	与保呂小学校
中保育所	大浦小学校	(50音順)

グループワーク

12グループに分かれて行ったグループワークでは、グループの中から1つの園又は校の連携活動記録シートを活用し、①幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に基づいた「子どもの学びや育ち」、②「よりよい連携活動にしていくための手立て」について個々に付箋に書き出していました。その後、付箋に書かれた①②についてグループの中で意見交換を行いました。各グループを代表して、4つのグループが以下のとおり報告を行いました。

【第9グループ検討事例】

池内小学校・池内幼稚園「すてきに へんしんしよう」

自分達で集めた秋の自然物(木の実、葉等)を使い、かんむり作りを通して交流する。5歳児、1年生共に達成感のある活動とするため、それぞれに自分でかんむりのデザインを考えた。また、1年生がお世話するのでなく、一緒に遊ぶことをねらいとし活動した。

- ・1年生はしっかりしなければ、頑張らなければという意識を呼び覚まし、5歳児は1年生に気軽に教えてと言えらる機会だった。【協同性・自立心】
- ・普段は発表しづらかったり、話をするのが苦手な子ども、子ども同士だと心と心のつながり合いで、自然と会話が生まれている場面をよく見かけた。【言葉による伝え合い】
- ・幼児期の遊びを通して自然と関わる中で、五感を働かせて学んでいる。そのことが全ての学習につながっていると言える。
- ・園と学校の先生同士で話をする機会を多く持ち、様々なことを教え合い、仲良くなりたい。そうすることで、新たな発見や気付きがあるのではないか。もっと気軽に連携できるとよいと思う。

～木下先生より～

- ・5歳児は、園で最年長なのに小学校に入ると最年少であることから、高学年にお世話されている。生活科では「自立」と言われているのに矛盾しているのではないかと。幼児期にいろいろなことができるようになって小学校に入学してきていることを忘れてはいけない。
- ・幼児期は、体・目・耳などを使っていろいろなことを学んできている。そこに小学校の学習を乗せていくことが望ましい。
- ・保幼小での連携活動は、生活科中心でなくどの教科であってもよい。先生の特技を活かした活動を取り入れるなど、できることから始めればよいのではないかと。
- ・小学校は郊外へ出かける際に、校外学習届を出さないといけないが、可能であれば、出かけた時に出かけられる環境を作ってほしい。
- ・以前、幼稚園の遊戯室で劇の練習をしたことで、園児が観客になってくれた。1年生は一生懸命練習し、また、園児にとっては刺激になり、両方にとってよかった。小学校の教室での学習と幼稚園の遊戯室での学習は全く違う評価感であり、子ども達の姿を見て、自身の評価感が変わった。

【第12グループ検討事例】

由良川小学校・八雲保育園「あきをたべよう」

サツマイモを植えたり、掘ったり、食べたりする従来の活動に加え、重さ比べをすることで、サツマイモとの関わりを深める活動とした。いろいろな量を準備し、試せるようにしたり、サツマイモを大・中・小の大きさに分け、全部でいくつあるのかを考えたりした。1年生は少し前に3つの計算の授業をしていたので、式に書いて考える子どももいた。

- ・春に植えたサツマイモを掘ると、ゴボウやゴーヤのようなサツマイモだった。どうしてこのようなサツマイモになったのか、子ども達がそれぞれに考える機会となった。
- ・「ばばかり」「ばねばかり」「体重計」を準備し、重さを量る活動を行った。大きさを分ける活動をしたり、重さを量ることで、数量や数への関心や興味を持つことにつながった。
- ・子ども達の活動に、思わず口を出してしまいたくなるが、子ども達の様子を温かく見守ることが大事だと言える。
- ・たくさん道具があるとよいと思い、色々準備したが、かえって子ども達が戸惑ってしまったかもしれない。
- ・重さが目に見えて分かるような、天秤やシーソーなども活用できるということに気付けた。

～木下先生より～

- ・サツマイモと3つの計算はピッタリの授業であると考えている。今回は、先に3つの計算の授業をしたと言われたが、実際に数えることを体験した後で教科書に入る方が、理解しやすいのではないかと考える。
- ・自分達で育てて収穫したサツマイモだから、誰一人数え間違わないだろうし、学びに必然性が生まれるのではないかと。
- ・導入はできるだけシンプルにし、5分程でよいのではないかと。「数えたい」「並べたい」「比べたい」という思いを持たせて、必然的に数えるとうい。
- ・以前の連携で、小学生が園に来た時に、園児が部屋から飛び出してくるシーンがあり自然体でよかった。連携活動は自然に、子どものありのままの姿でよいと考える。

グループワーク つづき

【第8グループ検討事例】

中舞鶴小学校・中保育所「なかよし芋パーティー」

5歳児と1年生が共に栽培したサツマイモを収穫し、クッキングをしたり、食べたりすることを通して交流を行った。(切ったサツマイモをホットプレートで焼く)調理の過程で、焼けるサツマイモの色や固さの変化に気付く姿や、お互いに声をかけあったり、協力したりする姿が見られた。

- ・子ども達の意欲を引き出すために悩んでいたが、小学校が保育所の子どもの散歩コースだったこともあり、自然に遊ぶ機会が多かった。
- ・1年生が5歳児に対して、お世話をするという意識を意図していたが、5歳児から言葉をかけたり、関わろうとする姿や協同する姿も多く見られた。
- ・1年生は、連携活動の後に絵手紙を作成し、振り返りをした。詩や図工の学習をする中で作り上げた作品であり、様々なことを振り返ることにつながり、思い出に残る活動になった。
- ・保育所で連携活動をする中で、主体的に活動する園児の姿が見られた。また、多くの児童は保育所出身であったため、心を開放しながら活動ができた。小学校に活動場所を特定する必要はないと感じた。
- ・子どもが自ら考えることができる場面設定や、創造性のある活動を組み込んでいくことで、さらに楽しくなるだろうと考える。

～木下先生より～

- ・散歩コースの中で交流するという必然性がよいと言える。
- ・「10の姿」で考えると【協同性】だが、生活科の場合は【互恵性】である。1年生が「〇〇してあげよう」ではなく、一緒に活動する、夢中になる活動を設定することが望ましい。
- ・連携活動は食育でもよいのではないかと。何より必然性が大切であり、出かけたり、訪ねてきてもらうとよい。



【第7グループ検討事例】

朝来小学校・朝来幼稚園「あそびのフェスティバル」

あそびのフェスティバルを連携活動とし、春からその準備等を5歳児、1年生、2年生が協力し合いながら進めてきた。事例は「ボウリングやさん」の様子であり、友だちと相談しながらピンを並べ方を考えたり、転がす物を何にするか工夫したりする姿が見られた。

- ・子ども達自身が、容器の並べ方や転がす距離、転がす物を考え、工夫があった。距離を推測する力や容器の重さを感じられた。
- ・朝来小学校は1、2年生が連携活動をしているため、3人が1つのグループとなっている。3学年(5歳児、1年生、2年生)だと憧れを感じられ、一緒に活動することが楽しさを見出している。
- ・毎年、フェスティバルを連携活動にしているが、数年続ける中で、回数を多く持つだけでなく、ほどよい回数があると感じた。お互いに無理がなく、子ども達もよい距離感を持っていた。
- ・大人は完成形を求めて子どもを誘導しがちだが、子ども達自身で、考え、工夫し、遊びを進めている。
- ・あるグループでは、ヤクルトの容器を使ってモグラたたきを生み出した。遊びが終わった時には容器がボロボロになっていたが、子ども達の顔はとても満足していた。また、別のグループでは、ペットボトルを避けて通る遊びをしていた。大人にとっては、面白いのかなと思うものだったが、子ども達には人気のコーナーだった。子ども達が生み出すものは感性があり面白いと感じる。

～木下先生より～

- ・(一つの活動に限らず)連携活動は何回行ってもよい。可能であれば何回でもよいのではないかと。
- ・夢中になれるような遊びや学習をどう作ることが大切である。チャイムが鳴っても「まだ続けたい」という気持ちが一番大事である。

講義

連携活動には「楽しく」「仲良く」も必要だが、生活科は、「気付き」や「探究」にねらいを置くことが大切である。そこに生まれた会話や子どもの学びを、言語化し残すことが大切である。

～木下先生講義より～

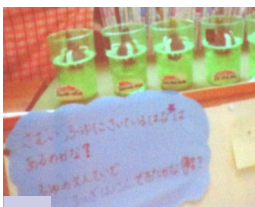
【連携活動の課題】

- ・連携活動に飾りなどは必要でなく、飾りを作るよりも一緒に遊ぶ方がよいのではないかと。
- ・「楽しく遊ばしよう」と書いてしまいがちだが、書かなくてもよいのではないかと。「仲良く」「楽しく」は子どもが決めることであり、「仲良くしなさい」とは言う必要はないが、仲良くしていることは褒めることが大切である。
- ・連携活動はありのまま、お互いに無理の言える関係になれるとよいのではないかと。それが本当に仲が良いということだと見える。
- ・連携活動だからといって、5歳児と1、2年生だけが活動するのではなく、他学年の子どもも参加することで活動が活性化されたり、質問を受けたりすることで、活動がよりよくなっていく。何をつなげればよいのか、活動の前によく考えることが必要である。

【幼稚園のビデオより】

◎環境について

- ・子ども達が気付いたり発見したりする環境があり、環境の中に子どもの学びを見込んでいる。ただ物が置いてあるのではなく、子ども達が気付くようなメッセージが添えられていることが



大切である。生活科もこうあることが望ましい。子ども達がより自然に興味を持つ環境を小学校の教室でどのように整えていくか、そのヒントは園にあると考える。

・幼児の生活の中には、言語、数量、科学、絵画、歌、表現等全て入っている。ただ単に物が置いてあるのではなく、子どもが興味を持ち、気付きや発見を誘発する言葉を添え、環境としてあるのが幼児教育である。

◎5歳児の表現遊びについて

・決められたセリフは一言もなく、自分で考えて話している。これこそ『表現遊び』であると言える。5歳児の時期にこのような表現遊びができるというのは、コミュニケーション能力が育っているということであると言える。

・5歳児は5歳児なりに、4歳児は4歳児なりに表現する。互いの姿を見せ合い、刺激を与えながら、幼児教育の質を上げていくことが求められている。

・表現遊びは見てもらうためにやっているのではない。イメージの世界に入って想像力を広げることや、自分が想像したことに合わせて体を動かすことが大切である。

◎話し合いの場面について

・理路整然と話せなくても、自分の意見でその子なりの表現ができればよい。言葉での伝え合いは、表現遊びだけの世界で育つのではな

く、普段から自分達で言葉を伝え合い、みんなが協同できることを日々の生活の中で育てている。

・4月から子どもを主体とした生活が営まれてきていることで、この時期に、自分なりの言葉で分かるように話すことや、上手でなくても伝えたい気持ちが育っている。また、周りの子ども達は、理解しようとして聞く力が育ってきている。

・これだけ育っている5歳児が小学校に入学するため、この上に何を積み上げていくかが重要と言える。幼児期と児童期がうまくつながることが望まれる。

【今後に向けて】

◎連携活動は無理をせず、できることから始めることが大切である。園長先生と校長先生の間で、普段から行き来できる環境を作ってもらえることが望まれる。

◎連携活動は、幼児の中には小学校への安心感が育ち、1年生は幼児と関わることで自立心や自己肯定感が育まれてくる。

◎幼児期が充実した幼児期であること、小学校が充実した小学校であること。充実したものと充実したものが融合することで、更に充実したものになる。それぞれの学びや育ちを充実させて、お互いの良さを学び合うことができる連携活動を続けていけるとよいと考える。